

## 「部外者」のカー “A Memorial to the Slain” 考察

宮内 妃 奈

“A Memorial to the Slain”は William Marchの作品の中でも異色のコメディである。1937年に書かれ、1939年に短編集 *Some Like Them Short* に収録された作品でマーチのお気に入りであった。<sup>1</sup> マーチの南部作品の代表都市である Reedyville<sup>2</sup>に起きた「戦没者記念碑」建造を巡るドタバタ劇を、町医者 Dr. Kentの妻である Mrs. Kentが、作家志望の Clark McBrideに話して聞かせるというものである。当時の書評でも“very funny”と評され、短編集に編纂された作品の中でも評価が高かった。<sup>3</sup> 語り手であるケント夫人は中産階級の視点から町の歴史を語る存在であり、この短編以外にも複数回登場しているマーチ作品の重要な語り手の一人である。初めに、彼女が“the most amusing thing”<sup>4</sup>「一番おもしろい出来事」と表現した事件の概要をまとめてみたい。

1920年にリーディヴィルの地元紙 *Courier*の編集者の発案をきっかけに、町に戦没者慰霊碑を作ることが提案され、そのための委員会が立ち上がることとなった。町の有識者の一人である Robert Porterfieldを議長に、Mr. Palmillerとその協会“vice society”<sup>5</sup>の人々がスポンサーとして名乗りを挙げた。リーディヴィル出身の戦没者は Breck Boutwellただ一人であった。委員会が立ち上がると間もなくして、ブレックの姉で、フランスで歌手として成功している Honey Boutwellから、記念碑建造に関わる費用を全額、自分が寄付すること、また、彼女の友人で世界的に有名な彫刻家である Paul Gagnon氏を建造のために指名したいとの申し出が入る。委員会は、ギャノン氏の素性を調べ問題ないと判断し、建造物の到着後は、町の中心である Court House Squareに置くことを約束し、準備を進めた。しかし、届いた

彫刻を先に確かめた委員会は、記念碑の公開と設置を延期する。その理由は、作られた彫刻が彼らの予想と大きく異なり、ブレック氏にそっくりの細部にこだわった「裸」の像であったためであった。委員会は、その後、設置場所を町の中心部から公園に移すことを決定し、ようやく町の人に披露する運びとなる。銅像を見た町の人々の反応は、大きく分かれた。まず、裸の像など言語道断であり撤去を訴えるパルミラー氏の協会と、それとは対照的に彫刻の芸術性を高く評価する人々、そのどちらでもなく町の宣伝になるのではないかと興味本位で像を見つめる人々である。結局、町の女性の貞操を脅かすものであるという理由で、反対派の協会の人々が集まり像の一部を破壊、すなわち「去勢」して、この騒動は終幕する。一部を破壊された記念碑はその後、貸し馬車屋の倉庫に放置されたままである、という事件である。

「町に戦没者慰霊碑がないこと」の経緯の概要をまとめれば以上のようになるが、物語は語り手を介しているため、色付けされた様々な解釈を可能とさせるものとなっている。本論では、この出来事を語るケント夫人を通して、話の筋にどんな要素が加味されているのかを明らかにしてみたい。William T. Goingが“voluble historian of Pearl County”と指摘し<sup>6</sup>、Simmondsがマーチの“counterpart”<sup>7</sup>と述べる語り手、ケント夫人の視線を通して、20世紀初期の南部共同体の在り様を探り、それに対する「マーチ」の視線に触れることを期待する。まずは、この騒動がどのように語られているのかを分析していく。

## 語り手による色付け

序文では、語り手の話の順序、個人的な見解を省いて、事件の概要のみをまとめたが、この章では語り手が語るままの構成に従って読み進めたいと思う。ケント夫人は事件を語る上でまず、主要人物である姉弟、特に姉ハニーに焦点を当てる。

“The story is a little involved, and I think I’d better tell you first about a girl named Honey Boutwell. She was run out of Reedyville by the same society that objected to the war memorial some years later, so the story ties in there, too.” (244-45)

最初に述べられていることは、戦没者慰霊碑を拒否した団体がいたこと、そして、ハニー・ボウトウェルという少女はその協会に追放された人物である、ということであり、両者に因縁があるということである。ハニーは町でも有名な “prize bad girl”(245)で、様々な出張移動販売員の男たちが宿泊するホテルの周辺、いわゆる夜の繁華街で、若い頃から歌やダンスを披露して時にはストリップダンサーのような仕事をして稼いでいた。そのようなハニーの行為を問題だと考える “Mr. Palmiller and his vice society”(245)は、ハニーを補導し、施設へ送還しようとするが、彼女はそれをすり抜け、町を逃げ出すことに成功する。その後、彼女はパリで「偉大な歌手」として成功を取めているということである。

ここまで説明するとケント夫人は次に、ハニーの弟、ブレックについて話を始める。そこで明らかになることは、彼もハニー同様に自由奔放な存在でバルミラー氏の団体から監視されていたということである。

“When Breck grew up, his love life ran true to the Boutwell tradition, and from all accounts he should have been enough to keep Mr. Palmiller’s vice society working every minute of their time, but the trouble was, they couldn’t get anything on him:... (247-48)

このように、三者の関係を述べたうえで、ブレックが戦死したこと、つまり、彼が戦没者慰霊碑の対象の人物であること、が示され、慰霊碑建立についての町の取り組みの詳細が説明されるという流れである。この語りの順番は、町の公的な取り組みであるはずの慰霊碑建立に、極めて個人的な心情が関わっているかのように、聞き手（読者）を意図的に誘導するものとなって

いる。

その後の話の展開は、従って、主に二者間（ハニーと委員会）の駆け引きに基づいて語られる。慰霊碑建設の委員会が立ち上がり、フランスの弁護士を通じてハニーの申し出が届いた際、彼らは真っ先にそれが信頼に足るものなのか確かめている。それはハニーとの過去の出来事が関連した結果であるのは言うまでもない。

The first thing Mr. Porterfield's committee did was to look up the sculptor, since they didn't have too much faith in Honey, and they didn't really believe that she associated with serious, substantial people. To their amazement they discovered that what the lawyers had said wasn't French exaggeration as they had suspected. It was all true. (252)

結局、ハニーの提案を断る理由が見つからないまま、委員会はギャノン氏の彫刻を受け取る。しかしながら、その像を見た委員会は、人々に公開せず、再度、ギャノン氏の素性について調査する。この委員会が狼狽する様子については、それを楽しむ人々の反応とともに、次のように説明されている。

"...the whole town was simply crazy with excitement, particularly when it was known that Mr. Porterfield had telephoned the Metropolitan Museum of Art in New York to find out if Paul Gagnon was really a respectable and reliable man. They wondered if there hadn't been some confusion in names, after all; but the gentleman from the Metropolitan said quite firmly that there was only one Gagnon and that there was no mistake, adding that the town should be immensely proud to have a piece of his work to exhibit." (253-54)

作品を拒絶する理由が見つからなかった委員会は、それを展示することにな

るのだが、これについてケント夫人は、ハニーと委員会（特にパルミラー氏）との駆け引きが、ハニーの勝利となったかのような表現をしている。

The invited audience at the unveiling took it politely enough, although I'll never forget the expression of baffled rage on Mr. Palmiller's face when he realized that he had sponsored this thing and that he had been tricked. (Underline is added, 256)

すなわち、多くの聴衆が落ち着いて記念碑を受け入れている中、「嵌められた」ことに対するパルミラー氏の怒りの表情が印象的で決して忘れられない、というのである。

その後、パルミラー氏側は、反撃を開始する。彼らは彫刻が「町の女性の目の毒である」と断じるリーフレットを町の人々に配り、彫像の破壊に至るのだった。この過程については、ケント夫人ではなくケント氏が語り手として、クラークに話をしている。ケント氏によれば、建造物の破壊は、自分たちが納得していたわけではなく、パルミラー氏たちの極めて一方的な行為であったことが強調されている。そして、ケント夫人は、クラークの「破壊された一部分の最終的な行方」についての質問に答える形で、町の皮肉に込められた噂を紹介し、締めくくる。

“...what became of the *detached* part of the memorial? If you do, I'll have to admit that nobody really knows. Some say the vice society has it on file with their postal cards and obscene literature; others claim that Sister Joe Cotton uses it in her office as a paperweight.” (259)

すなわち「目の毒」だと言って切り落とした彫刻の一部を「女性」であるシスター・ジョー・コットンが文鎮としてオフィスで使っているというのである。パルミラー氏とその協会の最終的な破壊の行為は、町の人々にとっても滑稽な出来事でしかなく、それを揶揄するものとなっている。彼らの噂は協

会に対する皮肉以外の何物でもない。

このように、語り手のプロットに従って事件を眺めてみると、ハニーとパルミラー氏の二者間の駆け引きと、それを第三者的に見つめるケント夫人（町の人々）という図式で語られており、町の公の取り組みが極めて私情が絡む個人的なレベルの話に落とし込まれていることがわかる。そして、ここでさらに注目すべき点は、この一連の出来事に対してハニー寄りに傾いていく共同体と語り手の視線が存在することである。ケント夫人は狼狽する委員会の様子について、時に手をたたいて笑いながら話をしている。戦没者慰霊の彫刻を待ち望んだ共同体も、「裸」の像を好意的に受け入れ、その像の一部を破壊した協会の奇行を嘲笑している。元不良の一少女の行為に、どのような魅力があったのだろうか。町の権力者たちを狼狽させる行動を喜ぶ根底にあるものは何なのか。

次章では、共同体が受け入れることになったハニーが象徴するものを考察するため、ハニーとパルミラー氏の委員会の関係を「定着者と部外者」の理論を通して読み解いてみたいと思う。共同体の反応の背景には、ハニー個人の枠を超えて、彼女が体現するものが関連しているのではないかと。

## 「定着者と部外者」構造

ケント夫人の語りには、共同体に存在する、あるいは彼女自身の階級意識が随所に表れている。例えば、ボウトウェル家について説明している部分では、彼らが住んでいる場所や仕事の内容を語ることによって、彼らの階級を示唆することを忘れない。

“...she[Honey] lived out near the canning factory. I can recall the Boutwell family very well indeed, since their mother used to do sewing for us...” (245)

実際、ボウトウェル家はゴーイングの言葉を引用すれば、“poorwhite trash”<sup>8</sup> に当てはまるという。さらに共同体において、この階級のランクは、家族の良し悪し、あるいは成功度を測る尺度となっていることが、語り手を通して見出せる。例えば、ケント夫人はハニーについて“nobody ever thought that dingy, hoarse-voiced little Honey Boutwell was going to be the only famous person that Reedyville ever produced” (246) と述べ、またブレックについても“to everybody’s surprise he died quite heroically, with a couple of medals” (250) と彼が英雄死したことに町の人々が驚いたことを明かしている。いわゆる下層階級であるボウトウェル家と成功は結び付かないのである。それが顕著な例として、地方紙の編集長が記念碑建立にあたり、町の戦没者を調べた結果、ブレックのみであったことが判明した時の反応を見てみたい。

[He] discovered that Breck Boutwell was the only man from our town who had been killed in the war. The editor would have preferred somebody from a good family, but Breck was better than nothing at all, and that week the *Courier* printed his picture and an account of his military career in the Marines, paying a good deal of attention to the two medals. (Underline is added, 250)

編集長は「良い家族」（名家）出身の戦没者を望んだが、ブレックしかいないことを受けて「いないよりまし」という理由で特集する。ボウトウェル家は、決して、編集長（慰霊碑建立を望む人々）が希望する階級の出ではなく、敬意を評されるに値するような家族ではない。

このように、地位や階級が高いことが「良い」条件とする視線は、ハニーが指名した彫刻家とハニーの評価の相関関係にも繋がっている。ハニーは弟のための彫刻建造を、世界的に有名な彫刻家に頼んだ。委員会は、最初はハニーの申し出を疑うものの彫刻家が本物であると知るや否や、瞬く間にハニーの評価を一変させる。“It wiped out Honey’s bad character

almost overnight.” (252) そして委員会は、“If she associated with great men, they argued, men whose biographies were actually in encyclopedias in public libraries, then she had either changed for the better since she left Reedyville, or they had been mistaken about her in the first place.” (252) と著名で立派な、地位のある人と知り合いであるという理由で、ハニーの評価を良い方へ押し上げるのである。この考え方は、階級・地位と人物の評価が同列であることを示すものである。さらに、委員会のメンバーがパルミラー氏の道徳協会員であることによって、次のような論理に繋がっていく。

“They said it was plain that Honey had repented at last, that there was good in her after all, and that it would not be Christian to prevent her doing this good and generous deed.” (252)

すなわち、人物の評価の高さにキリスト教的敬虔さが加わるのである。階級・地位が高い、それはすなわち良い人物である、さらにその人は当然、良きキリスト教徒である、という三位一体の考え方がパルミラー氏の協会員たちには当然のように受け入れられている。

このように、いったんは、ハニーを受け入れ彫刻を手にした委員会であるが、裸の像の「猥褻」と「芸術性」の間でジレンマに陥る。委員会がハニーを“repented”「更生した」と本当に考えたのであれば、「芸術性」が勝り、彫刻が破壊される必要はなかったはずである。しかし、パルミラー氏の協会は町の道徳を汚すと主張した。もちろん、ケント夫人がパルミラー氏の表情にハニーに「騙された」という怒りを読み取ったように、彼のハニーへの個人的な心情から像の撤去に至った、とも考えられる。しかし、最終的になぜ破壊しなければならなかったのか。彼らのメンツを保たなければならなかったのか。それについて、一つの示唆的な見解を与えてくれるのが、社会学者 Nobeit Elias の「定着者」と「部外者」の理論である。

「力・地位を持つものと持たざるもの」に優劣をつける見方、社会構造は、リーディヴィルに限らず様々なところで散見される。エリアスはその構造を



『定着者と部外者』という著書の中で一般化し、どのような力学が働いているのかを明らかにした。彼によれば、権力を持つ者たち（「定着者」）は、古くから共同体に存在し、伝統を継承し、強い結束力を持ち、対立する層（「部外者」）に対しては、その一部に「最悪」の性質を見出し、屈辱的なゴシップや品位を下げるコード名などを用いて対立項の「全体的傾向」として汚名化し、権力の機会から徹底的に排除することに長けているという。そうして「定着者」の集団は自己の優越性を維持し守っているという。リーディヴィルの例に照らし合わせて考察してみたい。パルミラー氏の協会は町の治安を司る特権的地位にあり、神に選ばれているという使命から、強い結束力をもって町の様々な問題に介入している。実際に、メンバーの長であるパルミラー氏は町の銀行の社長で財政力が有り、メンバーの中には町の様々な組織の長をしている者がおり、協会自体が戦没者慰霊碑建造のための公の委員会に名乗りをあげる存在である。一方、ハニーはもともと下層階級出身の「不良娘」であり、従って、両者はエリアスの言葉でいうところの「定着者」と「部外者」のカテゴリーに分けられるだろう。その、もともと下層階級であり、劣等性が付与されていたハニーが、フランスで大成功を収め地位も名誉も手に入れて優位性を纏って、共同体に存在感を示した。また、ハニーは自分の優位性を保証する駒として、ギャノン氏の芸術的著名度、高さをも利用した。ハニーが彼らのレベルに上り詰め、資格があることは明瞭であった。実際に、委員会がハニーの評価について見解を変えたことは指摘した通りである。しかし、「定着者」であるパルミラー氏側が取った行動は、最終的に芸術的作品に「墮落性」を付与し力づくで拒否することであった。芸術的価値が高いはずのブレック像を女性の貞操を脅かすものだと認定し、ハニーに再び「俗」のレッテルを貼ったのである。なぜなのか。

エリアスによれば、「定着者」の形態には、それが特徴として持つ普遍的な「集団的結合力」と「歴史性」が見出せるという。彼らの優位性は時間を経て築かれた揺るぎない結束力によって維持される。つまり、ハニーが拒否されたのは、彼女と協会の間「結合力」が欠けていたことにある。いかにハニーが地位を獲得し、成功を収めた人物であるとしても、リーディヴィル

の共同体の特権階級「定着者」側とハニーに強力な結びつきがあるはずはなく、従って彼らは慰霊碑像が裸であるという理由でハニーに「墮落性」を付与し汚名化したのである。パルミラー氏側による像の破壊行為は、エリアスの理論で言う支配者側が脅威に立たされるときに現れる、自己保存の普遍的な現象とも捉えられるのである。つまり、ハニーとパルミラー氏（協会）の対立は個人的な感情というよりも、社会力学的性質のものとして見るのが可能なのである。そうであるとすれば、パルミラー氏側がハニーに脅かされると感じたものは何か。また、ハニー寄りの共同体の視線はどう捉えられるのか。

ハニーとパルミラー氏側の二者間を「定着者」と「部外者」の力学で読み解くとき、ハニーが象徴するものは、町の特権階級の「保守性」に立ち向かうもの、「新しい力」であり、共同体のハニー寄りの視線は、まさに「新しい力」を望むものとして、捉えられるのではないだろうか。「新しい力」とは、昔ながらの階級制度に裏打ちされたものではない、新たな経済力をつけた新興上流階級として、伝統的階級制度の優位性へ挑戦するものであり、また、世界的に有名な芸術家を利用して「性」を描くことにより性の解放を叫ぶ、頑迷な強権的父権制による性の抑圧への挑戦であり、また、世界的に成功した「女性」として、南部の伝統的サザンベル崇拝に挑戦するものとして、様々に解釈することができるだろう。いずれにせよ、彫刻建造に手を挙げ、共同体への回帰を試みたハニーの行為は、リーディヴィルという南部社会に存在する伝統的な力学の均衡を壊すものだと読み取ることができるのではないか。

最終的には、像が破壊されたように「定着者」の強い抵抗が遂行されたわけであるが、それは20世紀初頭のアメリカ南部の限界を表しているに過ぎない。エリアスは、「部外者」と「定着者」の集団間の対立構造は、様々な力学の配置転換によって少しずつ変化していくと述べている。ケント夫人の語りには、リーディヴィルにおける「定着者」と「部外者」の二者間のちょうど間に立つ視線が現れており、それらこそが未来のリーディヴィルの「変化」をもたらす可能性として捉えられる重要なものではないだろうか。

## 結

ケント夫人はリーディヴィルの Overton家の娘で、幼馴染の医者フランク・ケントの妻となった。“The Borax Bottle”（1943執筆）では、二人の馴れ初めがクラークに語られている。彼女は、町の貴族ウェントワース家やリーディ家が繁栄していた時代を知り、その娘たちを憧れと羨望の眼差しで見つめ、また、ポウトウェル家のような白人や黒人の使用人を持ち、その力を借りながら生活をする生粋の南部白人（中流階級）である。彼女の、とりわけ「階級」についての視線は、1937年に書かれた“Not Worthy of a Wentworth”においても読み取ることができる。彼女はウェントワース家の娘 Carrieの変貌を目の当たりにすることで、上流階級の娘に期待されるものに疑問を呈し、必ずしも階級に拘る考え方（階級が高い男性と結婚しなければならない）が正しいとは限らないこと、その考え方が一人の女性を犠牲にしたことを知っている。

“...I used to laugh at her [Carrie], along with the rest of the town, but I don't any more. I understand her too well now. ...Poor Carrie! All she wanted was to marry a man who needed her, one she could love and serve faithfully.”<sup>9</sup>

キャリーは自分が望んだ男性（中流階級）との結婚に対して、ことごとく家族の妨害に会う。家族は妨害のたびに、彼女に結婚を諦める代価として数々の高価な品物を与えた。キャリーが身に付ける毛皮やお人形のような装いを羨んでいたケント夫人であるが、最終的には、キャリーが心から望んだものは地位でも高価なものでもなく、キャリー自身を必要としてくれる人だったとの理解に至る。

ケント夫人の特徴は、伝統的に共同体に属しているものの、それを支配する固定観念に囚われることなく客観的な判断に至ることができる柔軟性にあ

る。彼女は「階級制」を知っているが、それに基づいた「善悪」の判断をする精神構造をしていない。ポウトウエル家についても、「不良」であったハニーが「立派な」歌手になったという事実について「驚き」ながらも受け入れ、「遊び人」であったブレックに「ナンパ」された過去を懐かしみ、戦場で立派に戦死したことを認めている。このような南部の伝統的価値観に囚われないという特徴は、夫であるケント氏についても同様である。彼は、パルミラー氏の協会の最後の行為についてクラークに話をする際、ケント夫人の間に割って入り、次のように述べる。

“The funniest leaflet of all was signed by Mr. Palmiller himself,” said Dr. Kent, “and I’ve always thought his closing lines, from the standpoint of an old romantic like myself, the most disheartening I’ve ever read. Here they are, as nearly as I can remember them: ‘And so the womanhood of Reedyville must daily view this spectacle to their detriment: our pure womanhood, many of whom are mothers!’” (258)

ケント氏の語りには、南部特有の（アメリカ建国の理念に通じる）白人男性の父権性、宗教的正義を振りかざして女性を支配しようとする人々への懐疑、失望が表れている。「男性である」ケント氏から、このようなサザンベルに固執する旧態依然とした父権性への嫌悪が見出せることは興味深い。彼は「ロマンチスト」として男女の愛、性を自然のこととして受け入れている。

こうしたケント夫妻の寛容性は、南部を抜け出し、世界をビジネスマンとして駆け回り、経済的にも社会的にも新たな地位を獲得したマーチのものに繋がることは言うまでもない。マーチは11人兄弟の2番目の子（長男）として Mobile で生まれ、製材業の父の関係でフロリダや南部アラバマの小さな sawmill towns を転々とした。暮らし向きは苦しく14歳で働きに出て、十分な教育も受けてはない。しかし、第一次世界大戦に従軍して勲章を得、その後、Waterman Steamship Corporation で副社長として成功し経済力を得

ている。マーチはビジネスを通して、ニューヨークから戦時下のドイツ、イギリスを経て、アメリカに帰還した。このような彼の境遇は、まさにボウトウェル家のブレックやハニーに通じるものである。ハニーのブレック像が南部社会に動揺をもたらしたように、マーチの作品も「部外者」の力として南部の保守性に挑むものであると言えるのではないか。

## 注

- 1 今作は短編集 *Some Like Them Short* (1939) に掲載されて以後、*Trial Balance* (1945) と死後出版の *A William March Omnibus* (1956) に再収録されている。Simmondsの *TWWM*, p155を参照すると、マーチの手紙の引用とともに“The story remained one of March’s personal favorites to the end of his life.”と指摘されており、お気に入りであったことがわかる。
- 2 マーチがリーディヴィルの町の人々について描いたのは、1930年から31年の期間に多く、“Miss Daisy” (1930), “A Shop in St. Louis, Missouri” (1931), “Woolen Drawers” (1931), “Happy Jack” (1931)などがある。その後、*Come in at the Door* (1934) でChesterの叔母が住む地域として登場し、短編で用いられた同名の登場人物が現れている。このことから、マーチが執筆の初期の段階から、ある程度、何らかの拘りを持ってリーディヴィルの町の物語を創作しようとしていたことがわかる。その後、1937年に“Not Worthy of a Wentworth”と“A Memorial to the Slain” (1939年発表) の2作が執筆され、最終的に、リーディヴィルの集大成となる長編 *The Looking Glass* (1943) が生まれた。
- 3 *William March: An Annotated Checklist*, p145. 当時のマーチの *Some Like Them Short* の書評として、“Twenty stories, ranging from one or two pretty awful to one or two nearly first rate, and one (“A Memorial to the Slain”) very funny.” と *New Republic* で紹介され、また p150に“Rival to Saroyan”と題した書評で、“...‘Bill’s Eye,’ ‘Memorial to the Slain [sic], ...are as good as any stories you are apt to read anywhere: Interesting themes, credible and sometimes powerful characters, concentration of method, and solid feeling.”と評価される作品の一つに挙げられている。
- 4 “A Memorial to the Slain”, p244. これ以降の今作の引用は、本文中にページ数のみを示す。
- 5 このパルミラー氏の協会について詳細が述べられているのは、1931年執筆の“Woolen Drawers” (“Mrs. Joe Cotton”というタイトルで1934年に発表) で、the vice society とは“the Reedyville Society for the Fostering of Temperance and the Eradication of Vice” 「悪の取り締まりと根絶をめざすリーディヴィル協会」の略称である。主なメンバーに、Palmiller氏、Mrs. Joe Cotton、第二作目の長編 *Come in at the Door* の主人公チェスターの叔母 Lillian もその組織の一員として描かれている。彼女は、Federal

Women's Clubの長であり、町の貴族階級の女性たちで構成される Browning Clubの長をしている人物でもある。

<sup>6</sup> Going, p91.

<sup>7</sup> *TWWM*, p153.

<sup>8</sup> Going, p107.

<sup>9</sup> "Not Worthy of a Wentworth," p303.

#### 参考文献

Going, William Thornbury. *Essays on Alabama Literature*. Studies in the Humanities. Vol. no. 4. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1975. Print.

March, William. "A Memorial to the Slain." *Some Like Them Short*. Little Brown and Company, 1939. 244-260. Print.

---. "Not Worthy of a Wentworth." *Trial Balance*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1987. 294-305. Print.

Simmonds, Roy S. *The Two Worlds of William March*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1984. Print.

---. *William March: An Annotated Checklist*. U of Alabama P, 2015. Print.

エリアス、ノベルト、and ジョン・L.スコットソン『定着者と部外者』：コミュニティの社会学 大平章訳（法政大学出版社、2009）

